

『小説・修復腎移植』



著者・青山淳平

挿絵・山本良秋

発行所・本の泉社

## 指弾

宇和島恵州会病院は十一月二日、十一例の病腎移植を公表した。

そのとき、記者会見場は妙に静まりかえった。病気の臓器を移植につかうこと自体、常識ではありえないことなので、それが医療として現実にあつてよいものなのか、記者たちはあつげにとられ、ことの重大さに気づくまですこし間があつた。移植した腎臓の病名がひとつひとつ明かされると会場からしだいに驚きの声上がり、がんの腎臓のときには大きなどよめきにかわつた。内藤の見込みどおりマスコミは大騒ぎである。さらにこの日から、しつこく異様なまでに高まった丸山へのバッシングは、内藤の予想をはるかにこえ、苛烈になつた。

どこのメディアも医学界の権威の言葉を借り、病腎移植を批判し糾弾した。「他人に移植してつかえる腎臓を摘出していることがまず、医学的におかしい」

「患者をたすけるための医療ではなく、医者が移植ありきでつっぱしつた医療だ」

「医師から病腎の提供をもとめられたら、患者は断りにくいものだ」

「摘出の必要がない腎臓をとりだした疑いがある」

「医療倫理を置き去り、人間の臓器をロボットの部品のように扱っている」

「このような医療はぜつたい容認できない。医療とはとてもいえない」

「仲間内でこっそり腎臓をやりとりし、密室で手術を行った」

これらはすべて学会上層部の発言にもとづくものだった。

まるで犯罪行為である。

メディアからの取材が殺到したため、病院は玄関に警備員を常駐させ院内への立ち入りを阻止した。丸山は帰宅することができず、宿直室に泊まることになつたが、五日つづくときさすがに憔悴し、ほおがげっそりおちた。内藤は早急に記者会見をひらき、病腎移植の有効性を具体的に説明するよう丸山にすすめた。

院長の佐田は上京し、神奈川県の実山で療養している恵州会グループ総帥の徳川虎男理事長の指示をあおいだ。徳川は病腎移植の一部始終について、すでに専務理事から逐一報告をうけ、マスコミへの公表も承諾していた。

重度のALS（筋萎縮性側索硬化症）のため、直接会話ができない徳川は、かざされた透明なアクリル文字盤をつかつて眼光で文章をつくる。看護師が目のうごきをすばやく読みとり、佐田へつたえる。

徳川は見解を明らかにした。

「病腎移植ハ、コロンブスノ卵。腎不全ニ苦シム、患者ニトツテ、福音」  
佐田は報告した。

「医学界の上層部は病腎移植をつぶそうとしています」  
徳川は瞳をいそがしくうごかした。看護師が歯切れよく音声にした。

「コレハ腎移植ノ革命。既得権益ヲモツ組織集団ハ、アラユル手段ヲ講ジテ、弾圧シテクルダロウ。惠州会ハ、丸山医師ヲ、全力デ支エル」  
病にやつれた徳川の頬がひくひく痙攣している。

「裁判になると思います」

佐田は心配した。日本医師会との烈しい対立や政治権力によるいやがらせをのりこえて、一代で巨大医療グループを築いた徳川は、眼窩のおくの瞳をひときわ輝かせ、確固とした意思をつたえた。

「惠州会ハ、負ケナイ。ナゼナラ、勝ツマデ、闘ウカラダ」

翌日、佐田は本部事務総長の野添紘治郎と共に宇和島へ帰ってきた。

ただちに幹部会が招集された。参考人として内藤も出席した。

会をとりしきった野添は内藤の意見をいれ、丸山の記者会見を設定した。  
十一月七日の夕刻、会場になった大会議室の長机は報道陣でうめつくされた。その背後も横も、カメラがならぶ。ぶっきらぼうで一本気な丸山が立ち往生することを心配し、院長と事務局長にくわえて、野添事務総長も会見に立ち会った。

しかし、この日の丸山の会見は、売買事件のときとはおよそことなり、ホワイトボードをつかって何度となく病腎移植手術を凶解し、途中で記者の質問にも応え、訥弁ながらも熱心に手術の有効性を主張したので、会見はさながら医学講座のようになった。一時間をこえて熱弁をふるい、訴えた。

「そやから病腎をなおして移植するのは、特別なことでもなんでもありません。普通の医療やから、あんたらがなんでこんなに大騒ぎするのか、わたしにはわからん。この方法をみんなが認め、真剣にとりくんできたなら、おぜいの患者さんが救われるけんな」。

主なやりとりは次のとおりである。

―移植患者や家族に説明はしたか。

本人にも家族にも何度となく日を変え、場所を変えて一〇〇パーセント安んでは決してないことを説明し、十分に納得してもらっている。

―市立病院時代の手術では他の医師も病腎であることを知っていたのか。

当然だ。市立時代には毎週火曜日に検討会をもち、討議したからチームを組んでいた五、六人の医師はよく知っていた。このうちの一人が中四国腎臓学会で病腎移植を発表したこともあるから、県内外の泌尿器科の医師なら病腎移植のことは知っていたはずだ。

―最初に病腎を移植したときのことを詳しく聞きたい。

はつきりと記憶していない。普通の生体腎移植のほうがよく覚えている。いまふりかえってみると、病腎はもともと捨てる腎臓だから、手術のときに気持ちがとても楽だった。健康な人からとりだす生体腎の移植のときは緊張がまったくちがう。だから記憶にのこらない。

―厚生労働大臣は、「異常なこと、つかえる腎臓なら元にかえすべき」と発言している。

それは現場をしらない単純な発想だ。すべてケースバイケースであり、修復してかえすには患者の体力と時間がかかる。かえすとリスクがある患者が多い。患者もかえしてくれ、とは決していわない。

―これまで病腎移植で死亡した患者はいるか。

ひとりもない。ただし、生着しなくて人工透析にもどった患者はいる。

丸山の「講義」が功を奏したのか、翌八日の新聞各紙は、「病腎移植は気が楽」、「普通の医療で特別なことではない」、「患者も納得」など丸山の発言をくみとった見出しをつくり、「講義」の内容を記事にした。息を吹き返した愛媛新報の特命チームも同じような紙面をつくり、全国移植学会副理事長・多島伸一の次のコメントをいれていた。

「かれのやっていることは今日の医学の水準や常識をまったく無視した行為です。新たな医療をうみだそうとするのなら、それに必要な手順が多々ある。自分勝手な理屈でその正当性を主張して、人の身体をつかってやってしまう。こういうのは今日の普通の感覚だと、人体実験といえますね。医師がその都度、自分だけの判断でよいと思ったことをやって、目の前の患者さんだけが喜んでいる。もしこのようなことを日本中の医師がやれば、日本の医療はどうなりますか。医療は患者と密室で決められるものではない。患者のことを一生懸命考えてやっていることとは思いますが、自分ひとりの信念だけではあまりにも危険だ」。

水野は各紙の会見報道に目を通し、こころもち気分が晴れるのを感じた。

これまで学会上層部の広報機関になりさがっていたマスメディアが、売買事件ですりこまれた丸山医師にたいする悪い先入観をふりはらい、丸山の発

言や主張に耳をかたむけはじめている。多島伸一のコメントも、「人体実験」の表現はいただけないが、手続き面の批判は的確である。特命チームは報道の中立性への配慮からこの丸山批判のコメントを同じ紙面にいれたのである。うが、むしろ丸山医師の真摯な姿勢をきわだたせている、と水野は思った。しつこくつづいた丸山バッシングにいらだち、津和田と廊下やエレベーターで出会ったら、つばでも吐きかけたい気分だったが、これならいやみのひとつでもくれてやればよく、つかみかかるほどのことはない。丸山医師を支援するため、会を立ち上げるつもりの水野は、はりつめたままだった気持をやわらげた。

この頃のことである。

ある小さな会合が、東京赤坂の老舗料亭「江戸銀」であった。

この日、移植学会の元幹部がある医療業界紙の社主とつれだつて上京していた。ふたりは宿をとった東京駅近くのホテルにいったんチェックインし、約束の時間の三十分前に「江戸銀」へはいった。この料亭はここ数年来、厚労省のOBの元役人との会食でたびたび利用しており、元幹部にはなじみの店である。上座の席をふたつあけて待っていると、十分ほど遅れて厚労省健康局OBの松岡亮三と医療指導監査室・室長の田原克己が仲居に案内されて座敷にあらわれた。

松岡は上品な臙脂色えんじの土壁を背に席についた。とがったあごで、「きみ、こへ」と、田原の席を指定した。田原は黒いアタッシュケースを壁際におき、元幹部と社主へ一礼すると、座布団にやせた両膝をぴたりつけて座った。元幹部はこれまで松岡とは何度か電話でやりとりしたことはあったが、直接顔を会わすのははじめてだった。松岡がつれてきた田原とは当然、初対面である。たがいに名刺を交換し、元幹部は「特別医療指導監査官」という田原克己の肩書きに酒焼けした頬をゆるめた。

（これはいい男をつれてきてくれた）

「さあ、楽にしないよ」

元幹部は膝をくずすようにいうと、田原に愛用の酒をすすめた。

世間話をかわしたあと、元幹部のほうから本題にふれた。

「田舎の警察は、まったく間がぬけてますな」

「そりゃ先生。あそこは僻地やから、優秀な人間は住んどりやせんでしょう」と社主がもつともらしく追従した。

元幹部は松岡へ酌をしながら、本音をこぼした。

「臓器売買では、法的になんら問題がない、ということになりました。しかしこっちの心中は複雑です。売買事件で大騒ぎしましたが、なんのために大騒ぎしたのか、ほぞをかむ思いです」

「おっしゃるとおりの大山鳴動でしたが、これからです。これからですよ」と松岡は意味深な返事をした。すると社主が、

「松岡さん、こんどのことでは、厚労省の力を世間にみせつけましたな。やっぱし厚労省ですわな。監査は天下の宝刀ですわな」

と宇和島惠州会病院にたして行われた共同監査のことをほめた。

十月二十四日の監査のことである。この第一回の監査は、保健医療上の診療報酬に不正または不当の疑いがあるとして、健康保険法などの四つの法令を根拠としておこなわれている。厚労省からは田原をふくむ五名の特別監査官が現地入りした。愛媛社保局の事務官をふくめ二十名をこえる異例の態勢で惠州会へのりこみ、ふたつの会議室を借り切って、監査対象の病院開設者、管理者、保険医、そのほかの医療従事者全員を順次呼んだため、病院の機能は一日、マヒした。このきわめて威圧的な監査をしきったのは田原である。この監査のあらましを田原が話すと、顔を赤らめた社主が九谷焼の徳利をつかみ、

「あんさんは、医療Gメンの鑑かがみですわなあ」

と田原の仕事ぶりをほめちぎった。さらに酒をつぎながら、

「惠州会は監査でおいこまれ、とうとう病腎移植を公表したやないかと小気味よさそうに断じた。

元幹部はすぐにフォロウした。

「いやあ、あんた、田原さんの大活躍も松岡さんのおかげですぞ」

「はい。それは承知してます」

「医師の起訴にまでいたらなかったのは遺憾だが、売買事件を皮切りに惠州会を徹底的に監査すれば、病腎問題がかならずふきだす。われわれはそう見ていた。実際、惠州会は隠しきれなくなった」

「そういえば監査で追いつめられ、自殺した開業医もありましたなあ」

「監査となると医師も病院も死活問題です。私は以前から、丸山さんのことで出身大学の医学部から相談をうけていました。市立病院では、みんなが

病腎移植に賛成していたわけじゃない。心ある医師は懐疑的だった。市立病院も本当は困っていましたよ。こうやってとうとう明るみになりましたから、こんどはこの問題児を行政がどう裁くかです。がんの腎臓を移植するなど、禁忌中の禁忌ですから」

と元幹部は松岡のほうへ酔眼をむけた。

「厚労省は大臣発言にのっとって、迅速にやりますよ」

「そう願いたいですな。まさに異常な医療ですから」

元幹部に背中をおされ、松岡がさらにつけくわえた。

「今月下旬、本格的な共同監査をするため、厚労省はいま準備中です。市立はややこの手をひねるようなものだが、惠州会はてごわい」

「まあ、そうでしょう。あれは反逆児ですから。厚労省の腕力がためされる」

元幹部は遠回しにけしかけた。

「国家国民のためです。断固やるでしょう。この田原にはひきつづき首班として、処分が決まるまで取り組んでもらうことになります」

「いやあ、この方なら適任です。田原さん頼みますよ」

元幹部は二重あごをゆるめ、笑顔をつくった。

「ご期待にそえるよう全力でやります」

ノンキャリアからはいあがってきた田原は正座にもどると、元幹部と社主に深々と頭をさげてみせた。

この密談のことは、水野も知るはずはない。

しかし数日後、この密談に符号するかのようマスメディアは病腎移植について新たな事実を大々的に報道した。

宇和島恵州会病院への病腎のもちこみルートを解明し、丸山医師の仲間の四人の医師の実名と写真、それに勤務先の病院名を凶解入りで載せたのである。一見すると、ルート図はあばかれた麻薬の密売ルートのようにだった。

病腎がもちだされたのは、鹿児島恵州会病院、広島呉共済病院、それに香川労災病院で、これらの病院に勤務する三人の医師は運び屋として、まるで犯罪に手を染めているかのような印象である。三つの病院ともに院長は、「管理上の不手際があった」ことをみとめながらも、廃棄される臓器は「病理検査」の名目で、摘出した医師が出身大学へもちかえるケースも多い、と釈明していた。

どの新聞も丸山は、犯罪集団の首領のようなあつかいである。今後、移植

関連学会の専門的な調査をへて、病腎移植が「悪い医療」だという判断が下される可能性は高く、さらに厚労省の禁じる実験的医療にあたるということになれば、関係した医師の処分もありうるとする観測記事があった。情勢が一気に悪くなった。

水野が編集委員室の自分の机にしまつてある「えひめ移植者の会」の名簿をとりだし、丸山医師を支援する会の事務局をたのめそうな者をさがそうとしたときだった。電話が鳴った。有吉だった。

テレビの報道番組も朝から、丸山医師へ病腎を融通していた瀬戸内海グループの各病院前へ中継車をつけ、病腎とグループの医師のこともちきりだという。

「どうなるのでしょうか、とても心配です」

案じる有吉の声にまじつて、ゆっくりピアノを弾く音が聞こえる。

「いま、ご自宅ですか」

「あつ、すみません。いまレッスン室で生徒さん、といっても七十すぎの素敵なおばあちゃんですけど、バイエルのおさらい中です。わたしの声、聞こえますか」

「ええ、よく聞こえます」

と水野は応え、入り口のほうへ身体の向きを変えながらいった。

「ちよつと理屈っぽくなりますが、聞いて下さい。いまのこの状況は軍とマスコミが国論をあおり、戦争へと坂道を転がり落ちた戦前の日本と、構造は同じです。みんなが病腎問題を大きな事件に仕立てて、丸山先生をつぶそうとしているのです」

「どうしてですか。あんなに素晴らしいお医者さんなのに」

有吉のすずやかな声がかすかにふるえている。

「有吉さん、これはもう医学や善悪の問題なんかじゃありません。開国派の長英や崑山が獄につながれたのと同じです。エスタブリッシュメントによる弾圧そのものです。ぼくたちが丸山先生を支援しないと、先生は医療の世界から追放される」

「まあ、追放だなんて！」

有吉は絶句した。

「丸山先生を支援する会をつくりたい」

「賛成！ あたし、会員になります」

打てば響くような声がかえってきた。

「ありがとうございます。よかったら手伝ってください」

「ええ、どんなことでも」

「いきなり恐縮だけど、事務局をおねがいしたい」

「事務局、あたしが？」

有吉が問い返すと、水野はおしかぶせるようにいった。

「そうです。まずこの愛媛から支援者をつのりたい。やがて四国から中国、そして日本中に支援の輪をひろげるのです。支援の申し込みは電話で受け付ける。しかし、ぼくが勤務している間は、受付ができない。それで昼間、有吉さんの自宅を受付の事務局にさせて下さい。事務局といっても支援者の名前と連絡先をメモしてくださいればよいのです。夜と休日はすべて僕の自宅の電話で受け付けます。どれだけの方が電話をしてくるか、やってみないとまったくわかりません。いまのマスコミ報道では、丸山先生は容疑者あつかいですから、だれも支援の電話をしてこないかもしれない。いや支援どころか、抗議の電話が殺到するおそれだってあります」

沈黙があった。ピアノが鳴っている。

有吉が驚き、ためらうのも無理はない。

受話器からは、ピアノの音だけが聞こえていた。

「もしもし、でも、あなたしかいないのです」

と水野は口説いた。すると、

「ご免なさい」

と有吉のおちついた声がかえってきた。彼女はとっさにつきの三つのことを考えていたのだ、と沈黙の言い訳をした。一つは彼女が出かけているときのこと、これは留守電で対応する。二つは抗議の電話だった場合、これは録音し、その内容をメモして水野へ伝える。そしてもうひとつ、肝腎なことが不明だった。彼女の自宅の電話番号をどのような方法で周知させるか、である。一番の方法は、「丸山支援」を記事にしてもらうことだった。それも県内では圧倒的な発行部数をもつ愛媛新報がベストである。地元紙だと有吉と水野のふたり分の電話番号を掲載することもありうる。ただ、そこまで大きな記事にしてもらうためには、インパクトのある支援の声でなければならぬ。そのためには丸山医師の患者、それも病腎を移植している患者が支援の名乗りをあげる。そのような気概ある患者はいないだろうか。

有吉が話し終えると、水野はきっぱり、いった。

「おっしゃるとおりです。今日の夕方、県庁記者クラブで会見をひらきま

す」

「病腎を移植された方ですか」

「そうです」

「だれですか、よろしければ、お名前を」

「水野正良、私です。ネフローゼの腎臓をいただいています」

「……………」

「事務局のこと、ひきうけて下さいますか」

水野はダメを押した。

「わかりました。ただひとつ、さっそく意見があります。会見の前に、愛媛新報さんにはお話しされたらどうでしょうか」

「それはまた、どうして？」

「だって、水野さんがお勤めになっていらつしやる新聞社じゃありませんか。みなさん、そのほうが気持ちよく受けとめてくださる、と思います」

たしかにそのとおりなのだが、水野は特命チームによる印象をもっていない。

返答をしぶっていると、有吉は水野のそんな気持ちを察したのか、

「会を立ち上げるとなると、公人ですよ。個人的なことはぬきにしないと  
いけません」

とさっそく水野に釘をさした。

水野は名称を「丸山先生を支援する会」とした。そして移植医療の推進などの活動目的と会員資格、組織のあらましと連絡先の電話番号を箇条書きにし、リリースペーパーを一枚つくった。会見前に社内ですすめると、やはり津和田である。秘書に在室をたしかめ、役員室へでかけた。

角の小さな応接室で津和田と向き合う。

「いいことじゃないか、おおいにやれよ」

津和田はすぐに賛意を述べた。

容疑者あつかいされている医師を患者が支援しようというのだから、対立軸ができてニュースとしてもおもしろく、読者の関心をますます誘うことになる、と津和田はメディアの立場から話したうえで、取締役として忠告した。

「会の会長はあんたがやるのは控えたほうがええな」

「そのつもりない」

津和田はひとつうなずき、

「いやなことをいうが、この先、丸山医師の逮捕や医師免許のとりあげが

あったとき、会長がわが社の社員だったら、報道の公平性に疑念をもたれるおそれがあるからな」

「逮捕などありえんが、社としての心配はわかる」

水野も、会社には恩義を感じている。

津和田はもうひとつ、

「それに会の名だけどな、丸山先生を支援する、ではまずいぞ」

と遠慮なく異議を唱え、ペーパーに記された名称をみつめた。

「そのものずばりで、わかりやすいと思うのだが」

「水野、もっと冷静になれよ。丸山医師を全面にだせば、そりゃ賛同する者もいるだろうが、かかってくる電話の大半は丸山さんへの中傷や非難、罵詈雑言になってしまうぞ」

だとすれば、その原因をつくったのは、あんたが統括している特命チームじゃないか、と水野はつつこみそうになったが、そんなことをいいに来たのではない。

「誹謗中傷はともあれ、たしかにこの名称だと支援者はかぎられる」

「そうだろ、それが大きい」

「別に考えないといかん」

水野が思案顔になると、津和田はポンといった。

「会の目的を名称にすればいいじゃないか」

「移植医療を推進する会？」

「それは、直截ちよくさいすぎる。もっとやわらかく、たとえば移植医療への理解を求める会、はどうだ」

「理解を求める、か。うん、それはいいな」

「なんだ、しかしおれがあんたの会の名称をつけるのもヘンな話だなあ」

「ふん、こっちだって嬉しくはないが、よいものはよい。ひとつ借りがで

きたが、理解を求める会にする」

「わかった、まあがんばれよ」

津和田は思わず手をさしだそうとし、ひっこめると両手をこすりあわせた。

夕刻、記者クラブへでかける前、水野は内藤へ電話をいれ、会の立ち上げを知らせた。

内藤はいっになく高い声でいった。

「患者が医師を支援して行政や学会と闘うなんてことは、これまでの日本

では考えられなかったことです。日本の医療の新たな夜明けですよ」

「顧問を引きうけてください」

「もちろんです。宇和島へはいつ来ますか」

はずむように内藤は応えた。

「第三水曜日、十五日です。でも必要とあれば、明日にでも行きます」

「いやいや水野さん、明日からは数日、松山を離れられんことになりますよ」

「それくらいの影響があれば、心強いことですが」

「殺到しますよ。電話が鳴りっぱなしになる」

内藤は断言したが、水野はそのようには思えない。

「十五日までに数十人でも会員が確保できれば成功です」

「ははは、なかなか慎重で手堅いすな。まあ、どうなるか、明日が楽しみです。いずれにしろ十五日。この日にとことん話しましょう」

内藤は目をきめると、電話をきった。

水野が記者クラブへゆくと、すでにテレビカメラが何台もすえてあった。

病腎の移植者の会見ということで、メディアの注目度は予想以上に高かった。水野は記者の質問に応えて、ネフローゼ腎の移植体験をつぶさに語り、丸山が患者を救うことに一所懸命な医師であることを強調した。そして移植医療への理解がひろまり、病腎移植への誤解がとけ、普通の医療となることを願う、と訴えた。

翌朝の新聞各紙は水野の会見を記事にした。

愛媛新報は連載中の臓器移植特集のなかで、拳をふりあげ腎臓疾患について持論を展開する丸山医師の三段抜きの写真の下に、四段ほどのスペースをとって「移植医療への理解を求める会」がつくられることを伝え、文末に水野の氏名と住所と連絡先（午後六時以後は水野、昼間は有吉の電話番号）をのせた。